

批評と紹介

敦煌學 第一輯

(ドゥミニエヴィル先生八〇歳祝賀記念號)

池田 温

敦煌石室の古文獻が世に顯われてからすでに約七〇年の歳月が流れた。今や敦煌學の名は世間に定着し、關係論著の数は夥しく、しかも年々研究分野は拡がり追求は微に入る段階を迎えている。今回「敦煌學」という専門誌の刊行をみたことは、敦煌研究の展開の上に更に新たな拍車を加えるものとして注目をひくといえよう。

本誌編刊の趣旨は卷頭にある潘重規(字石禪、一九〇八生、香港中文大學新亞研究所)氏の発刊詞に明らかである。一部を訳引すると、

そもそも敦煌の文籍はもと吾國の瓊宝であったが、ただ清朝の政綱が乱れその職責を守らず、これを愛護せずして散佚させてしまった。しかしながらこれが四海に公けにされるや、かえって天下の才智ある者をしてこぞって輝かしい成果を挙げさせるを得た。いわゆる天下の宝はまさに天下とこれを共にすべしであつて、斯學の不幸中の大幸といわ

ざるを得ない。だが顧みると外國に比し斯學に心力を尽した學者がひとり吾國に少いのは、わが國學者の耻ではなからうか。同人らは研究討議の際このことを深く憾みとした。我ら一同の考える所は、斯學の隆盛をはかるにはまず急務として雑誌を刊行するにしくはなく、それにより敦煌文籍に関する論著を内外研究者の前に呈供することができれば、我々の理想を実現する一段階とならうというにある。そこで敦煌學雑誌を創刊する編輯規約を商定した。その主なものは左のとおり。

本誌の内容は、論著 およそ内外の敦煌に関する著述を要を択んで掲載する。

書評 およそ新出著作について忠実な紹介或いは公平な評論を加える。

資料 毎号敦煌文獻を影印し學者の研究に供する。以上三種とする。

思うに斯學の著作は従来多く外國語で發表されたので、本誌は特に規定を設け、掲載するすべてを皆訳して中國語を用いることとする。我々の微衷は、中國の學はこれを中國の文に帰そうというにあり、これはおそらく世界の中國學を修める者の共通の願望でもあらう。

むかし唐蕃翻經大德法成は麥を人に与え經典を抄録させたが、同人らはその高風にならい、遂に各々私財を供して印

刷の費にあてた。

という次第で本誌は生まれたのである。

たまたまポール・ドゥミエヴィル教授の八〇歳誕辰に当るので、創刊号は同教授八〇歳祝賀記念特刊とされた。すなわち巻首にドゥ教授の肖像を掲げ、李璜氏の賀詩・饒宗頤氏の寿序及びドナルド・オルツマン氏の手になる「ドゥミエヴィル教授年譜 一八九四—一九七四」・「ドゥミエヴィル教授著作目録統編 一九七二—七三」(共に呉其昱氏訳)が誌面を飾っている。李詩はドゥ教授の論文「中国文芸における山の意義」に因んだものであり、饒序は仏教学・中国学にわたる稀世の碩学の業績を古めかしい文体で闡明頌揚した美文である。

更にドゥ教授の労作 *Le Concile du Tibet* の序説と歴史考証のさわりの部分を、詳細な注記も含め呉其昱氏の訳出した「吐蕃仏教会議(選訳)」を含むことにより、本誌はドゥ教授の敦煌学の重厚な本領の一端をうかがうに最も有益な文献とみなされよう。八世紀に吐蕃王のもとでインド僧 *Kamalasila* らと中国僧摩訶衍らが仏教々義の宗論をたたかさせたことは、プトン仏教史等チベット史伝に見え、カマラシーラの「修習次第」は梵本・チベット本が知られていたが、ドゥ教授は、摩訶衍と知合いの吐蕃占領下敦煌の旧官人王錫の撰になる「頓悟大乘正理決」を敦煌写本中に発見し、これが論争

の直後に唐人の立場で著された宗論の書に他ならぬことを明らかにし、その全文を仏訳し、更に当代の歴史的背景に関する詳細な注釈を加え *Le Concile de Lhasa* (1952) にまとめられたのであった。本書は訳者のいう如く、唐と吐蕃の文化交流に関する最もくわしく深くつっこんだ重要な著作であり、わが国でも本書の序説は島田虔次氏により「ラサの宗論」として訳出され(東洋史研究一七—四)周知の所である。訳者呉氏(一九一九生、仏国科学センター研究員)はドゥ教授の高弟で漢蔵両語に通じ、本書の内容を知悉しているのでその訳は細部にわたって信頼がおける。特にドゥ教授自身の手訂本により訂正や補入を加えており、原著にプラスする所のある点は特筆に値する。標題を *Le Concile du Tibet* と改められたのもドゥ教授自身であり、宗論がラサではなくサムイェの寺院で行なわれたとする見解を受入れられたのである。かように自説に固執せず納得がゆけば改訂してはばからぬ所に、その学問の景仰される所以が存し、又原著刊行後の研究文献が注記の随処に補入されているのにも、日々精進を続ける著者の努力に頭が下る。

次に掲載論文を一覧すると、饒宗頤(一九一七生、香港大学)「孝順觀念と敦煌仏曲」は、中国で古来伝統的に優越せる徳目であった孝行が中国仏教にいかに入られ、仏教の本来の姿を変容せしめ又漢人教化の方便として大きな役割を

果したかを、敦煌の曲(詞)・変文を中心に述べたもの。かかる主題はわが国では道端良秀・金岡照光諸氏、アメリカのケニス・チェン(陳觀勝)氏らの詳論された所であるが、ドゥ教授と共同で敦煌曲を整理された饒氏自ら、敦煌曲全体を通じ最も顕著なモチーフが『無常』と『孝順』の二者であると断言されるのは印象に残る。宋代の東京夢華録にみえる毎年七月七日から十五日(中元)にかけ目蓮経が売出され目蓮救母雜劇が上演される習俗が、今なおマレーシアやシンガポールの華僑社会に保存されているというのも興味深い。孟蘭盆経や仏説父母恩重経の類の流行は敦煌本にも見出され、曲にうたわれる十恩徳等は父母恩重経から脚色されたとみられ、レニングラード本雙(原本作雙)恩記も仏報恩経悪友品をたねにした変文とされる。

陳祚竜「中古の敦煌と成都を結ぶ交通路」は、「劔南西川成都府樊賞家雕印」の中和二年(八八二)具注曆断片及び「西川過(一作戈)家真印本」を伝抄した金剛般若波羅蜜経が敦煌から発見されており、又敦煌県令張清通(字文信)写真(讚)に「大中(当解中和年間)赤泉沸騰、駕行西川蜀郡。……公乃独擅、不憚劬勞、率先啓行、果達聖障。……駱駝伝驛、渉長溪、来還本府。……大中之載、駕行西川、公能尽節、面对竜顔。」とみえる例を挙げ、敦煌と四川地方の交渉を指摘する。交通路としては、沙州—肅州—甘州—岷州—松

州—蜀及び沙州—紫(子)亭—青海—鄯州—岷州—松州—蜀の南北二本が想定される。敦煌文献中には後蜀の年号を用い「広政十年八月九日、西川静真禅院」で写した跋をもつ維摩詰経講経文や、成都府沙門藏川の述になる仏説十王経(絵入り)なども含まれており、蜀との交流は看過し得ぬ問題であり、陳氏の一文はそれへ注意を促すものである。

蘇燾輝「素勲・張承奉節度帰義軍の年代を論ず」は、素勲大順二(八九一)年?、景福二(八九三)年末或いは乾寧元(八九四)年初、張承奉・乾寧元年六・七月、天復三(九〇三)年?を夫々の節度使在任期間とする。羅振玉・向達・藤枝晃氏らの夙に論ぜられた所で、その結論は通説と大きな差はなく、又確実な明証を提出されてもいないが、敦煌石窟の实地調査の経験ある蘇氏の議論は、供養者題名や官衙の解読・解釈に独自の説を含んでいる。

ジェイムス・ハミルトン「敦煌出古代トルコ文占卜書」は、後記(呉其昱訳)は、三個のサイコロ(四面に各一個、四個の〇をもつ)による古代トルコ語予言書の朱書奥書を訳し詳注を加える。本資料は夙にトムセンの研究を通じ有名なものであるが、著者は近年の古代トルコ語学・歴史研究の新知見を通し再検討を施し、「虎年(九三〇)年の可能性が強いとする」二月十五日、小僧が大雲寺の堂において預言師からききとり、我が兄熱情將軍 Ir Aduq の為(に)写し了る。」と

訳す。

本誌で一番長篇は、奥書等に紀年のあるペリオ敦煌写本を年代順に著録したマリロローズ・セギ女史の「パリ国立図書館蔵敦煌写本題記編年録初稿」である。ここには北魏の皇興五年(四七二)から北宋初の己亥年(一〇〇〇)に及ぶ五三〇年間にわたり、計五一五件が列挙されている。この中には著作中に現れる年月を拾い出した例(慧超在五天竺国伝の開元十五年十一月や闕外春秋の天寶二年六月十三日の類)も若干あるが、大部分は奥書の紀年や文書の日付によるもので、該写本の書写年代を示すものである。付属の細片等を除き大約三千点弱と算えられるペリオ敦煌漢文写本の中で、紀年文献が五百件を超す事実は、スタイン本約八千点中三百数十点(ライオネル・ジャイルズ録)、北京本八千数百点中四十数点(許國霖録)、レニングラード本約三千点中四十点余(メンシヨフ等目)といった他蒐集に比し、ペリオコレクションに紀年のある文献の比重が著るしく大きい点を明示する。これは将来者が奥書を有つ写本及び紀年のある文書類を選択したことを、数字的に裏付けるものであり、ペリオ蒐集の価値を印象付ける。なお紀年文献の年代分布を見ると、

五世紀	一件	〇・二%	八世紀	八七件	一六・九%
六世紀	一七件	三・三	九世紀	一六〇件	三一・一
七世紀	三六件	七・〇	十世紀	二二四件	四一・五

批評と紹介 池田

の如く時代を降るほど幾何級数的に増加するが、但だ十世紀の内訳は前半一三五件・後半七八件であって、むしろ前半がピークにみえる。紀年文献の年代分布から敦煌文献全体の年代構成を推測することも巨視的には可能であろうから、敦煌文献の2/3は九・十世紀の物とみてよく、五・六世紀以前はほんの数パーセントにすぎないのである。本篇は初稿とことわってあるように、細部にはなお検討を要す個所が散見するが、ジャイルズ氏のスタイン本紀年録と併せて、敦煌文献の範囲と性格を概観するには頗る便利な著録といえよう。

陳鉄凡「三近堂說經簡記」は敦煌本儒教經典に関するノートで、易十一、書卅四、詩廿八、礼十二、左伝卅五、穀梁五、論語五四、孝経卅一、尔雅三、計二二三点(相互に接合するものを含む)を算え、論語・孝経の普及、周礼・儀礼・公羊・孟子の欠を指摘する。

なお資料として、唐太宗書温湯銘唐拓、「貞觀十五年七月臨出此本、將善進記」の後記をもつ智永真草千字文殘卷の写真を収め、前者に陳祚竜、後者に臺靜農氏の簡単な解説を附す外、頓悟大乘正理決・観心論・禅門経一聯貝葉の影印とH. B. Dees後記の写真(漢文と重なり不鮮明)を論考に挿入してある。

以上の内容を含む本誌は、フランス・香港・マレーシア・台湾居住の中国人学者とフランス人研究者の国際的協調の上

に成ったもので、今日の敦煌学をほぼ代表するものと称し得よう。

多様な言語資料を含み、何よりも諸民族・諸文化の接触交流の記念物たる敦煌文物の研究が、外地に在る中国人及び外国の東洋研究者の関心を強く牽付けるのはいわば必然である。加えてかれらは客観的に研究上幾多の便宜を有するのみならず、「華戎の支える一都會」と古来称された敦煌住民に主体的共感を懐く面でも、本国の研究者とは異なるユニークな視点をもち得るのである。本誌の継続発展に期待する所以である。

〔敦煌学 第一輯 戴密微先生八秩大慶祝寿專号〕 香港
新亞研究所敦煌学会編輯出版、一九七四年七月、二六・五
種、一一三十一頁）

青山博士
古稀紀念 宋代史論叢

柳 田 節 子

本論叢は、宋代史関係論文十八篇を納める。テーマについてみると、塩業、軍糧の調達・漕運、水利、宗室関係等々、

関連ある問題を取上げている論文もいくつかあるので、相互に連関性をもたせつつ、テーマ別に分けて、宋代史を構成し得るような書評を考えてみた。しかし、その内容に立入って行くと、それぞれに独自の方向で論旨が展開され、強いてグループ化しにくい側面もあり、結極、執筆者順に、個々の論文について若干の感想をのべるに止めることにした。

先ず、伊原弘「南宋四川における呉氏の勢力―呉曦の乱前史―」は、南宋前期、呉玠・璘・挺・曦と四代にわたって四川、特に利州路を中心に軍閥の勢力を持続した呉氏一族の動向を、特に、璘・挺二代について考察した論文である。氏は一方において、呉氏一族の世襲的勢力に対し、王朝は絶えず牽制政策を試みたとされ、他方、「南宋初めの一片の政策の変化により姿を消していく諸武將と同様に宋朝機構内での有権力者に過ぎない」といわれて、その権力の寄生的性格、脆弱性を指摘されているが、この矛盾する両側面をどのように統一的に理解し得るかは必ずしも明らかではない。これは、氏の立論が、呉氏勢力の消長を、主として王朝によって任免される呉氏の官職の異動を基軸に考察されているためではないかと思われる。「前代の没後直ちにその官を継がない点では世襲でない」と云えるが、勢力を温存する点では世襲と云える」といわれるが、温存された世襲勢力の基盤は何か、呉氏一族が、軍閥として四川という特殊具体的な地域社会と、ど